

国際農業者交流協会の海外農業研修その2

—アメリカでの林業・畜産研修 西山史恵さん—

主任研究員 室屋有宏

前回(本誌2012年3月号)は、国際農業者交流協会の海外農業研修の制度の概要と石井理事長のインタビューを掲載したが、今回は現在、宮崎大学農学部生物環境科学科の学生で森林を専攻する西山史恵さんの「米国研修」について紹介したい。

1 普通の留学を超えた体験を求めて

西山さんは2010年3月～11年9月まで、海外農業研修でアメリカに滞在した。海外で林業や英語を勉強したいという希望とともに、「ただの留学よりは何か得る体験をしたい」という気持ちからこの研修に参加した。

西山さんと一緒にアメリカに研修に行った同期生は37名。米国研修の最初の2か月間は準備期間という位置づけでワシントン州のBig Bend Community Collegeで寮生活を送り、授業、home visit、視察等を通して、アメリカの習慣や文化に触れた。13か月間の農場実習後にUC Davis校で同期生と再会し、2か月間の専門実習を一緒に過ごした。同期生とは年齢も違うが「敬語なしに自由に話せる仲間」として一生の財産になったと西山さんは振り返る。

2 実習先は果樹・畜産・林業の大経営体

西山さんが実習を行った農場は、ワシントン州ブルースター(Brewster)にあるゲバース農場(Gebbers Farm)で、アメリカで3番目(イコール世界で3番目)に大きなリンゴとチェリーの果樹園であり、収穫期には2,000人近く雇用する大農場である。果樹以外に林業、畜産も経営しており、5人の兄弟姉妹が団結しながら各部門を運営するファミリー企業体である。

ここで西山さんはForestryの研修生として13か月間の研修を行った。主に6～10月は林

業、冬場の11～翌4月は畜産、また翌5～6月は再び林業について実習した。

3 フォレスターが林業経営の要の役割

ゲバース農場は約2万5千エーカー(約6,250ha)の森林を所有している。かつては木材伐採をしていたが、現在はリーマンショック後の住宅不況で建築材の採算が合わないため木材出荷はせず、間伐材を薪に加工し、販売している。アメリカでは、暖炉を持つ家が多く、また夏のキャンプ、BBQ用の薪需要が大きく利益も高いため、薪生産だけでもビジネスとして成立している。

森林専攻の西山さんにとって、アメリカの林業経営は、「林業運営に関しては、アメリカの方が日本より高いレベルにある。大型林業機械の開発も進んでいて効率性が高い」「アメリカは、日本のように山の地形が急ではないため、林道の整備が進んでおり、大きな林業機械も山で作業することができ、そのぶんコストも抑えられている」等、アメリカから学ぶところが多いとの印象を持った。

またアメリカでは森林・林業を管理する専門職であるフォレスター(forester)が中核的な役割を果たしている。フォレスターが、木の成長モデルの作成、林道管理、林業経営の全体管理を行うことで、事業の効率性が高まっている。西山さんは、「日本でもフォレスター制度を早く確立する必要がある。日本では戦後に植林したスギやヒノキが成熟した今、それを利用しないと無用の物になってしまう」と危機感を持った。

現場でフォレスターから毎日直接学ぶことは、西山さんにとり充実した日々だった。特に一緒に働いた農場のフォレスターBillが素晴

らしい人で、「彼に会ったことで自分の人生が少し変わった気がする」という。Billから、森林測量や森林・材積調査の方法、機材の使い方、林業機械の操作、アメリカの林業の現場の仕事の仕方などにいろいろ丁寧に教えてもらったことに大変感謝している。

4 放牧主体の畜産

ゲバース農場の畜産部門はアメリカのなかでは小規模だが、肉牛の繁殖、肥育を行っており品質の高さから利益率も高い(去勢牛・雌牛2,823頭、種牛120頭、肥育牛450頭等)。品種は種牛のすべてと繁殖牛のほとんどがアングスである。

冬場、山に牧草が十分成長しない時期になると、牛を平場に移し餌を与えるが、飼育は野外で分娩もほとんど人手をかけず行われる。そして4月後半以降、山に十分な牧草が生えるころから秋まで牛を放牧し、その管理をカウボーイが行う。西山さんは「ある意味で、アメリカの畜産の方が環境にやさしいのではないか」と感じた。

実習では、冬場にフィードロットへ牧草を積み込んで牛に牧草を与え、また牛へビタミン剤を注射するなど、早朝から遅い時は夜10時過ぎまで働いた。体力的にきついときもあったが、西山さんはワンダーフォーゲルで鍛えていたので大丈夫だった。注射のため数十頭の牛を追いこんだ時に、ボスにGood jobとほめられた時は嬉しくて涙が出そうになったという思い出もある。

5 アメリカ研修で感じたこと

「アメリカでは『農業はビジネス』との考え方が浸透しており、販売方法、将来の経営計画などの展望もしっかり持っており、経営のやり方がうまい」。また「アメリカの農業者は、人が生きるために最も必要である食べ物をつくる農業という仕事にとっても誇りと自信をもっており、それが後世にも伝わり農家を継ぐ



木材の集積作業中の西山さん(後姿)

人が多いのではなかろうか」と西山さんは感じた。

さらにアメリカのいいところとして、オープンで何でも前向きに、楽しんでやる点を挙げる。西山さんは、BillがいつもLife is fun(何でも楽しんでやりなさい)と言っていたことを、いまでも印象深く思い出す。また例えば、季節労働者でも経営トップに対して提案しており、決して一方的な関係ではない。経営者も毎日現場に出て、従業員との信頼関係を積極的につくろうとする。

他方、日本農業については、「日本の農業技術と、農業に対する農家の熱意は世界に誇ってよいものだと思うが、国だけでなく、農家自身もっと創意工夫するべきだと思う」と指摘する。合わせて、西山さんはこの研修を通じて農業を志す熱い気持ちを持つ若い人たちが多くことを実感し、そういう人たちが将来を見据えて農業ができるようなサポートを拡充する必要性を強く感じた。

「日本では新しく入ってきた人たちに冷たい傾向があるが、アメリカの人たちはとても親切だ。アメリカの人たちの素晴らしいところを忘れず、またアメリカで見た日本人の素晴らしいところを持ち続けていきたいと思う」という西山さんの視点に、日本農業の将来につながるヒントが感じられる。

(むろや ありひろ)